

特集 自ら学ぶ力を育てる

付録の活用法

—自身の世界の著者になる

田嶋 美砂子 (星美学園中学校・高等学校)



「自ら学ぶ力」は、「学習者の自律性 (learner autonomy)」を連想させる。諸説あるこの概念の定義のうち、深く共感するのが「自身の世界の著者になること (to become the author of one's own world)」(Pennycook, 1997, p. 39)である。この定義は、学習者個人の心理や認知を超え、学びが遂行される社会的、文化的コンテキストにも目を向ける必要があることを示唆している。

では、日本の中学生が英語を学ぶコンテキスト、すなわち「公教育」かつ「外国語としての英語 (EFL) 教育」の場で、生徒が自身の世界の著者になることを手助けするために、私たち教師は、何ができるのでしょうか。ここでは、24NCにおいて大きな力を注いだ付録に焦点をあて、考えてみたい。

付録概観

24NCを手にすると、実に多くのページが付録に割かれ、また、内容も充実していることがわかる。例えば、BOOK 1の構成は、以下の通りである。

- ・ Further Reading
- ・ 教室でよく使う英語
- ・ 絵でわかる英語のしくみ
- ・ つづりと発音【母音】
- ・ 単語の意味を確認しよう
- ・ 単語の意味
- ・ ローマ字表 (ヘボン式) / 数の言い方
- ・ 英語の筆記体
- ・ いろいろな単語

学年が進むと、「つづりと発音【子音】」(BOOK 2)、「英文手紙の書き方」(BOOK 2)、「不規則動詞活用表／早口ことば」(BOOK 2, 3)、「基本文のま

とめ」(BOOK 3)などが新たに加わる。また、Further Readingの数も段階的に増えていくので、生徒の成長に応じた指導ができる作りとなっている。

「絵でわかる英語のしくみ」

このコーナーは、名称からも推測できるように、生徒が理解するのに苦慮すると思われる英語の特徴(以下の一覧を参照されたい)を視覚的に説明することを目的としている。

[BOOK 1]

①語の順序 ②動詞 ③人称 ④名詞と冠詞 ⑤代名詞 (人称代名詞)

[BOOK 2]

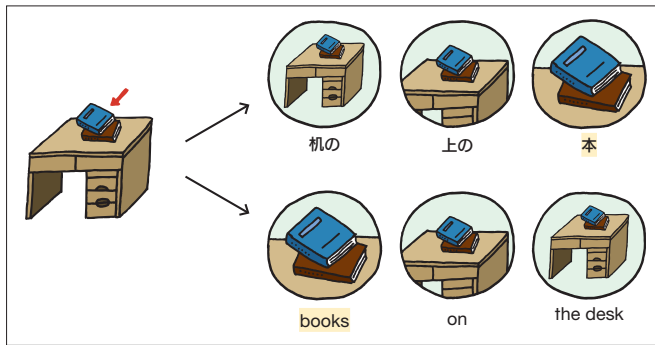
①たずね方と答え方 ②名詞のつくり方 ③いろいろな助動詞 ④いろいろな前置詞

[BOOK 3]

①時制 ②日本語と英語のちがひ

例えば、BOOK 1の「④名詞と冠詞」では、理解しやすいイラストで場面を設定し、可算名詞と不可算名詞、定冠詞と不定冠詞の使用法の違いを描写している。また、BOOK 2の「④いろいろな前置詞」では、「位置」を示す前置詞 (on, in, at など) の核となる意味 (例えば、on の「接触」) を絵で表現することにより、一義的になりがちな訳語での説明を超え、前置詞のより適切なイメージを提供している。

このコーナーのさらなる特徴は、視覚的表象に加え、生徒が持つ日本語の知識も活用できる点である。例えば、BOOK 3の「②日本語と英語のちがひ」では、日本語の発想で描かれた絵と英語の発想に置きかえられた絵を対比させ、それらが最終的に両言語における語順の相違につながることを示している。



BOOK 3

「絵でわかる英語のしくみ」

②日本語と英語のちがいを

外国語学習に母語を介在させることは、賛否が問われるかもしれない。しかし、生徒の大半は、成育過程において日本語を習得し、それを通じて公教育を受け、日々思考力を養っている。その日本語を意識的かつ自覚的に使用し、外国語の1つである英語と向き合う行為は、言語そのものを理解する上で、大変重要なことであるように思われる。

「絵でわかる英語のしくみ」では、それまでの学習事項が親しみやすい形でまとめられている。教科書を何気なくパラパラとめくっていたら、思わぬ気づきがあった、つい読みふけてしまったなどという生徒がいたとしたら、うれしい限りである。

「いろいろな単語」

このコーナーの特色は、単語が「学校」、「教室の中にある物」、「スポーツ」、「衣類・身につける物」などの項目ごとに分類されており、一覧できる点にある。また、「1日の行動」という項目では、朝起きてから夜眠るまでの動作表現がほぼ網羅されているなど、単語レベルを超えた言い回しのリストもある。さらに、学年が進むと、「環境」(BOOK 2, 3)や「平和」(BOOK 3)といった難易度の高い項目が加わり、発展的な学習を促すことが可能な構成となっている。

さて、これらを授業内で最も効果的に活用できるのは、各課の後半にある USE の Mini-project や Write に取り組むときであろう。例えば、BOOK 2 では、「私の夢」についてスピーチの原稿を作成し、実際に発表する Mini-project が用意されている。なりたいものはあるが、英語で何と言ってよいのかわからないという生徒には、46 名の職業が列举された「職業」の項目を参照させるとよい(もちろん、なりたいものがないと訴える生徒には、別の対応が

必要である)。

BOOK 3 には、日本について説明する Mini-project がある。モデル文は、例として浴衣、提灯、かき氷を挙げているが、「いろいろな単語」にある「日本文化・日本の行事」を活用し、伝統芸能や祝日を紹介することもできるであろう。さらに、BOOK 3 の最後には、20 歳の自分に向けて手紙を書く Write の活動が配置されている。ここでは、「思い・考え」の項目にある expect, believe, guess, imagine, decide, wonder などの動詞を用いながら、未来への気持ちをつづり、中学校における学びの集大成としてくれたらと願っている。ちなみに、この Write には、「20 歳になったときに読み返せるように、手紙の清書をしよう。」という指示がある。提出された清書を教師が大切に保管し、生徒が 20 歳を迎えたときに全員集合、返却という試みも面白いかもしれない。

私の勤務校は、1 学年 3 クラスの小規模校である。それゆえ、甚だ手前味噌ではあるが、面倒見がよいことを特色の 1 つとしている。一方、反省点として職員室内で常に上げられるのが「自ら考え、学ぶ生徒をきちんと育てているであろうか」という問いである。学びのよき同伴者となりつつも、与え過ぎず、自発性を大切にしつつも、働きかけは止めない。そんな隘路を歩みながら、24NC を通じ、生徒一人ひとりが自身の世界の著者になることができるよう、サポートしていけたらと考えている。

【参考文献】

Pennycook, A. (1997). Cultural alternatives and autonomy. In P. Benson & P. Voller (Eds.), *Autonomy and independence in language learning*. Longman.

TAKAHASHI SADAO

MATSUZAWA SHINJI

IKENO OSAMU

TANABE YUJI

SHIGEMATSU YASUSHI

MORI CHIZURU

TAJIMA MISAKO